浅間山の大噴火(天明三年)に伴う泥流層下の瀬戸美濃陶器

仲　野　泰　裕

はじめに

浅間山は、群馬、長野両県にまたがる活火山であり、縄文時代以来、数次にわたる噴火が知られている。これらの噴火は、降灰成分の分析、層序、文献などの研究の結果、最も新しい層から、浅間A降下軽石層(天明三・1783年)、同B降下スコリア軽石層(天仁元・1108年説が有力)、同C降下軽石層(4世紀前半)、同D降下軽石層(縄文代中期)とそれぞれ分類呼称されている。(注1)そして、これらの降下火山灰堆積層は、これに伴って検出された遺構、遺物に時代観を与えるにあたって重要な手掛かりとされている。

ここでは、「天明の浅間焼け」と呼ばれる約3箇月間に及ぶ噴火に伴う、A降下軽石層と同時発生して吾妻川(利根川の上流)流域の各地に空前の大被害を与えた、厚さ3m以上に及ぶ泥流層の下から出土した陶磁資料を扱うものである。この厚さ3mを越える泥流の堆積層は、通常の耕作などでは層序の攪乱を生じることはなく、当時の文物を、そのまま我々に示してくれるはずである。しかし、大量の火山灰、ひと抱え以上もある火山弾、軽石等を主とした泥流層を深さ3m以上掘削することは、常に崩落等の危険が伴うなど多くの問題点があり、調査目標に適した調査区の設定、拡張に支障をきたすなど数々の困難がつきまとっている。

このような数々の問題点を克服しつつ、昭和54年に鎌原遺跡(群馬県吾妻郡嬬恋村鎌原)、同58年に中村遺跡(同県渋川市中村)が、発掘調査され、多くの近世陶磁資料が出土している。

鎌原遺跡は、昭和25年以降、小規模な造成工事等に伴い、遺物、遺体の発見が知られていたが、昭和54年、学習院大学前学長児玉幸多氏を代表とする「浅間山麓埋没村落総合発掘調査会」が組織され、十日ノ窪を始めとして、10箇所に調査ピットを設けて発掘調査されている。泥流層は、山際の傾斜地で2m前後、その他は3～4m前後の堆積が認められたが、一部では9mを越える泥流層を確認した調査ピットもある。一次調査(注2)では、寺院跡、民家等の一部が検出され、陶磁資料等の出土も知られる。鎌原遺跡は、その後も継続調査されており、出土資料の一部は、同村立歴史民俗資料館に展示されている。

中村遺跡は、関越道渋川インターチェンジ建設に伴う発掘調査で約32,000㎡が調査対象とされており、(注3)3m前後の泥流の堆積が確認されている。天明期の遺構面は畑地であり、溝、畦(あぜ)、道路、井戸等が検出されており、陶磁資料の出土も多い。古文書によると、中村の被害は、417人中、男8人、女16人流死、93軒中、67軒流失、流死馬3頭とある。

この他、高崎市の下之城村遺跡、天王前遺跡、上滝遺跡等において、浅間A軽石層の堆積が確認されており、これに伴う溝状遺構等が検出されている。

1.　中村遺跡出土の近世陶磁

泥流堆積層の最下層及び天明三年当時の遺構面からは、それ以前の歴史的資料が大量に出土しており、陶磁資料については、在地産の須恵器を始めとする各時代ごとの出土が認められる。このため、産地、時代共に幅広いものがあり、出土資料のすべてに対して、そのまま18世紀の第Ⅳ四半期という位置付けができないことはいうまでもないことである。

中村遺跡からは、石塔、砥石、鍋、煙管、寛永通宝、飾金具等の他、小片を含めて1,371点の陶磁資料が出土している。陶磁資料の生産地は、肥前系52.8％（陶器21.8％、磁器31.0％）、瀬戸美濃系陶器42％で、全体の94.8％を占めており東西の大窯業地の供給力がしのばれる。この他には、京焼系、信楽系、備前系を含めて僅に1.6％、産地不明陶器3.0％、在地の土師質陶器0.7％となっている。

又、器種別では、碗類が最も出土量が多く全体の62.2％（瀬戸美濃系陶器20.4％、肥前系磁器19.3％、京焼系0.3％、不明陶器1.3％）である。この他に、皿類が9.6％と非常に少いのが特徴的である。さらに、台所用鉢類6.3％、壷・甕類2.1％、徳利・瓶類1.2％、神仏具4.2％、燈具1.3％等がある。

生産地・器種別では、このような傾向を示しているが、これらの点の詳細については、発掘調査報告書である『中村遺跡』所収の「中村遺跡出土の近世陶磁」に詳しく述べたので、ここではその概要にとどめたい。(注4)このため、次項以降、中村遺跡から出土した大量の陶磁資料から、18世紀後半代と考えられる瀬戸美濃系資料を抽出して、他遺跡・窯跡出土資料等を対象しながらさらに細かく見てゆきたい。

2. 天明期の瀬戸美濃系陶器

近年、江戸時代に及ぶ近世陶磁の研究は、急速に進展しており、肥前系、(注5)瀬戸美濃系、(注6)共に基本的編年観は示されるようになっている。しかし、細かくは不充分な点が多く認められる。瀬戸美濃においても、18世紀後半から19世紀前半にかけて、幾つかの画期が認められ、これらを正確にとらえるためにも、天明三年の降灰、泥流層により厳封された遺物群は、非常に重要な意味をもっており、詳細にわたる検討を加える必要がある。

これらの資料を細かにみてゆくと、幾つかの特徴を認めることができ、施釉・施文技法からは、陶胎上絵付、掛け分け、錆釉等を掲げることができる。さらに、器形的には、水鉢・半胴甕、捏鉢、片口鉢、擂鉢、燈具、仏餉具等に、この時期の特徴を認めることができる。

3. 施釉・施文技法の示す特徴

(1) 陶胎上絵付

中村遺跡からは、陶胎上絵付を伴う丸碗、小鉢の破片が出土しており、胎土、釉調、上絵付文様等の観察の結果、その多くのものは瀬戸美濃製品であることが認められる。

中村遺跡出土の陶胎上絵付を伴う丸碗は、小片が多く図化できなかったが、全体に薄手成形で、腰部は丸く、小径で低い高台を伴う。釉薬は、僅に淡い緑色を感じさせる透明釉で全体に薄く均一に掛けられている。上絵付は、オレンジ色に近い赤色、緑色、水色、黒色等で、笹文風の文様を三方に描く単純な構成が多い。

瀬戸美濃系諸窯においては、杢兵衛(もくべい)窯跡（愛知県瀬戸市窯神町）、四ツ屋窯跡（岐阜県土岐市土岐津町）等から陶胎上絵付資料の出土が知られている。(注7)(注8)

一方、瀬戸地域における陶胎上絵付については、安永～天明期（1772～89）に編纂された『張州雑志』(注9)第九一巻所収の「瀬戸村図」に「色絵ヲ付ルカマ之」として、錦窯（「瑠璃絵焼窯」）が、本窯から離れた位置に図示されている。又、別項には、錦窯の詳細図を示すと共に、窯道具の紹介と使用法、窯詰め等についても記述している。さらに、施文後の丸碗も描かれており、その碗形、文様は、中村遺跡並びに杢兵衛窯跡から出土した丸碗と、多くの特徴が共通しており、

類似性が高い。

又、上絵付用の薬については、「陶器ニ青赤黒等ノ薬ヲ以テ再ヒ絵ヲカキ焼キ付ル……」とあり、焼成については「茶碗ナドハ允ソ千二三百程入テ焼ト云ハリ」「此下ヨリ炭ヲ入口ナリ」等の記述がある。なお、別頁には素焼窯を図示し、「此ノ竈ニテスヤキヲシテ其後クスリヲ塗テ本窯ニ入レ焼ク」と説明しており、陶器生産における素焼技術の導入時期の問題等、今後の課題として指摘しておきたい。

杢兵窯跡より出土した陶胎上絵付丸碗は、図・2－23のとおりであり、半球形の器部と小径の高台が特徴的である。『張州雑志』にみる陶胎上絵付丸碗よりさらに腰部の丸味が顕著であるが、文様には共通性が認められる。一方、18世紀後半代に京都の公家用の注文帖として有田に残る『御用誂物雛形』にも、薄手、半球形、小径高台の丸碗が多く認められることなどから、当時の京都を中心に盛行した碗形であると考えられる。(注10)このように、杢兵窯跡出土の陶胎上絵付丸碗は、18世紀後半代に位置付けできる要素が認められるが、さらに考古学的資料の増加を待ち確かなものとしたい。

小鉢に、陶胎上絵付された資料は、現在までのところ窯跡からの出土例は認められない。しかし、中村遺跡出土の陶胎上絵付小鉢（図・2－**22**）は、胎土、釉調、上絵付等の観察から、瀬戸美濃系諸窯の製品と考えられる。又、この形状を示す小鉢は、平野西窯（岐阜県多治見市奥川町）、(注11)かみた窯跡（愛知県瀬戸市下半田川町）(注12)より、鉄釉と灰釉の左右掛け分け施釉法（後述）を伴う資料として出土しており、18世紀後半以降認められる器形と考えられている。

このように、資料的に不充分な点があるが、窯跡、消費遺跡、文献等の各方面から、18世紀第Ⅳ四半期における陶胎上絵付資料の存在を確認することができる。さらに、関連資料を収集し、瀬戸美濃系諸窯における、陶胎上絵付技法の上限についても理解を深めてゆきたい。

(2) 掛け分け

異なる釉薬の掛け分けは、赤津長根窯跡（愛知県瀬戸市赤津町）出土の広口壷にすでに認められ14世紀前半と考えられている。(注13)近世においては、17世紀中葉の大川東1号窯跡（岐阜県瑞浪市陶町）、(注14)田ノ尻窯跡（同）出土の大皿と碗に、灰釉と鉄釉の左右掛け分けによる施釉法が認められ、瀬戸地域では、(注15)半田川窯跡（愛知県瀬戸市下半田川町）(注16)において、同様の左右掛け分け碗が出土しているが、いずれも個体数は少いようである。

一方、肥前系磁器窯においては、寛文年間（1661～73）を中心とした時期に多く認められ、皿屋谷3号窯跡（佐賀県藤津郡嬉野町）(注17)からは、透明釉と鉄釉の左右掛け分け磁器皿、波佐見百貫窯跡（長崎県東彼杵郡波佐見町）(注18)からは、透明釉と鉄釉の上下掛け分け磁器花瓶、碗が出土している。

中村遺跡からは、鉄釉と灰釉の左右掛け分け小鉢（図・2－**20**）が出土している。この類例は、陶胎上絵付の頃ですでに述べたように、平野西窯跡、かみた窯跡から出土しており、18世紀後半以降盛行した器形、釉法と考えられている。(注19)そして、これと相前後する時期から碗類を中心に、内面と口縁外側上半部を灰釉系、高台端部を除く残りの外器面全体を鉄釉（褐・錆）系で掛け分けた資料が多く認められる。上限及び、左右掛け分け製品との関連については不明な点が多いが、火入、小壷、徳利、仏花瓶等、器種の増加が認められる。(注20)

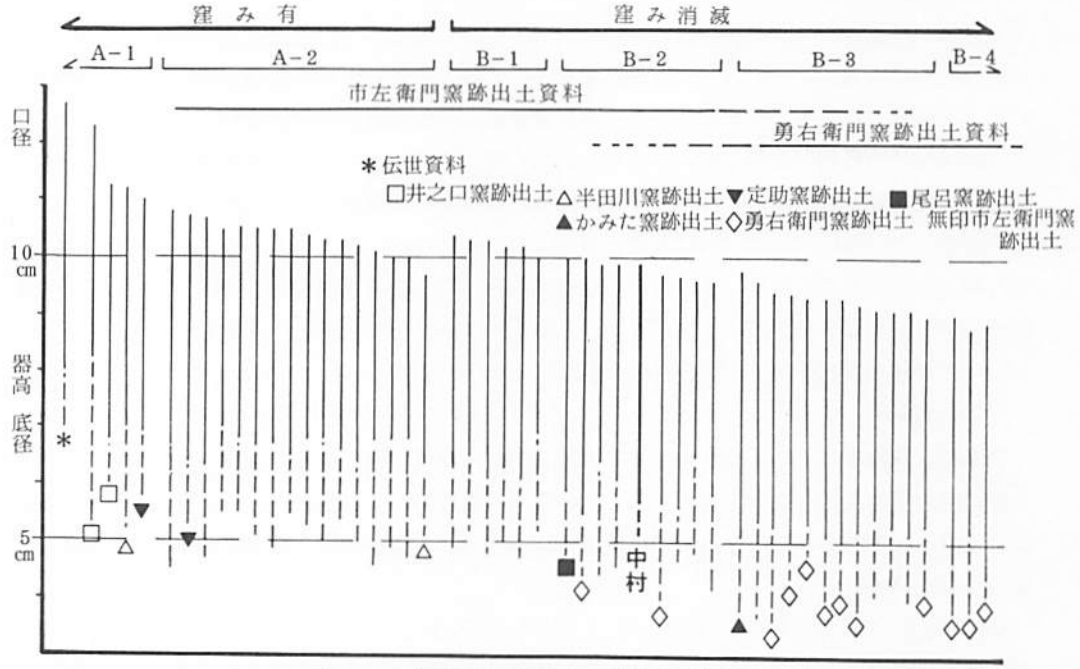
中村遺跡からは、灰釉と鉄釉の上下掛け分け（原則として内面及び口縁外面上半と高台端部を

除く残りの外器面を掛け分ける－以下同じ）碗（図・2－**10**）、火入（図・3－**8**）が出土している。この上下掛け分け碗は、僅に厚手の成形となっており、口縁下部の釉境には、螺旋状の沈線文が認められるが、胴部に窪みは無い。図示したように、器高 5.7 ㎝、口径 9.9 ㎝、高台径 5.1 ㎝を測り、器高と口径の比は、1：1.75 である。この掛け分け碗は、天保十五（1844）年に発刊された『尾張志』編纂に伴う調査記録である『瀬戸資料全』に、「腰錆小服」という註を付けて図示されている碗と系譜を共にするものと考えられる。これによると、釉境に沈線は認められるが、胴部に窪みは認められず、他の部位に比べ高台径が小さく描かれている。この他、同様の上下掛け分け法によるもので釉境に細い沈線が幾条も認められる「糸目」と呼ばれる碗や、「御む路」「白利休」「廣東」「小平」「黒利久」「ヲカタ」「黒小丸」「長の」等が描かれている他、「天目」「黒天目」が描かれており、今後の検討課題である。

一方、これらの上下掛け分け碗は、井之口窯跡（岐阜県土岐市駄知町）、市左衛門窯跡（愛知県瀬戸市背戸側町）、杢兵窯跡、かみた窯跡、勇右衛門窯跡（同西茨町）等からの出土が知られる。

現在までに知られているこれらの上下掛け分け碗の内、最も古く考えられるのは図・2－1に示した資料である。伝世資料であるため焼かれた窯は不明であるが、上下掛け分け及び釉境に螺旋状の沈線を伴う他、胴部には小さい窪みが多数認められる。口縁端部は外反しており、貼付高台は幅広く、多くの資料には不明印（当該資料は「出来山」）が押されている。これに近い特徴を示す資料は、井之口窯跡等からの出土が知られている。

次に市左衛門窯跡出土資料が注目される。これらは、発掘調査によって得られた資料では無いが、天目茶碗を伴い、19世紀に至る長い操業期間が予測される窯で、この一括資料の中に上下掛け分け碗が認められ変化を辿ることができる。市左衛門窯跡出土の掛け分け碗は、口縁下部の釉境に螺旋状の沈線を伴う他、胴部の近接した2箇所に押圧による窪みを施し、口縁端部が外反す



表－1　上下掛け分け碗　計測値分布

る大形の碗と、窪みが認められず、腰部が丸味を帯び口縁端部が直立する碗との二種類に大きく分けることができる。後者は、同様の特徴を残しながら小形化する傾向が認められる。

さらに勇右衛門窯跡からの出土が知られるが、現在、発掘調査報告書をまとめるべく整理作業が進められており、詳細についてはこれにゆずることとする。しかし、すでに一部資料は発表されているので、それらを加えて、すでに知られている上下掛け分け碗の、器高、口径、底径の計測値の分布を示したのが表－1である。これによると、市左衛門窯跡出土資料中に、中村遺跡出土資料に相前後する計測値を示す個体が認められる。又、勇右衛門窯跡出土資料についても、中村遺跡出土資料に近い個体が例外的に出土する他、最終末と考えられる器高$\frac{4.4\,cm}{1}$：口径$\frac{8.9cm}{2.02}$という個体まで、小形化しながらほぼ連続的な推移を示している。このため、はっきりした区分は困難であるが、**A－1**群・口径11㎝以上（小形の窪みが多数有。口縁端部外反。）、**A－2**群・口径11～10㎝（胴部に窪みが2箇所有。口縁端部外反。）、**B－1**群・口径10㎝以上（窪み消滅。口縁部直立。以下同）、**同－2**群・口径10～9.5㎝、**同－3**群・口径9㎝以上、**同－4**群・口径9㎝以下に分かれる。又、器高は、**A－1**群が7㎝以上、**A－2**群及び**B－1**群までは、7～5.5㎝と不揃いである。**B－2**群及び－3群は、6.5～5.5㎝前後に終始し、**同4**群は5㎝以下となる。

主な資料は図示（図・2－1～17）したとおりである。本稿において仮称した**A－1**群は、その中でさらに、若干の隔たりが認められるので、中村遺跡出土上下掛け分け碗から少くとも3～4形態の器形変化を溯ることができ、同様に2形態下る器形変化をたどることができるので、全体として6～7形態の変化を想定することができる。(注26)

この様に、上下掛け分け碗の器形変化を辿ってゆくと、市左衛門窯跡、かみた窯跡、勇右衛門窯跡等の操業期間が重複していることが予測される。さらに市左衛門窯跡からは、『瀬戸資料全』に図示されている「御む路」と呼ばれる碗が出土しており、これらを総合的に考察することにより、18～19世紀諸窯の操業期間を究明することも可能となってくるが、本稿の趣旨から逸脱するので、別稿へゆずることとする。(注27)

さらに、中村遺跡、鎌原遺跡からは、鉄釉（漆黒色）と褐釉又は、鉄釉（漆黒色）と灰釉を用いて上下掛け分けた鎧手碗が出土している。鎧手は、回転体を用いて施文したものであるが、後者は、文様に簡略化が認められる。しかし、勇右衛門窯跡から多く出土する緑釉と褐釉の上下掛け分けを伴う鎧手碗は出土しておらず、前二者とは若干の時期差が認められる。

この他、中村遺跡からは、尾呂茶碗と俗称される褐釉の碗が出土している。しかし、中村遺跡から出土する多くの資料は、すでに、口縁部の内外上端に藁灰系の濁釉を、つけ掛けする手法が簡略化されており発色の弱いものが多い。これも上下掛け分け手法ということができ、前述の上下掛け分け碗との関係等、今後の課題も多い。

(3) 錆釉

錆釉は、鉄釉の中で最も珪酸分の少いものを指して使用されているが、瀬戸美濃系諸窯においては、14世紀末葉より擂鉢が登場すると共に使用されている。しかし、この錆釉は、永く他の器種にはほとんど使用されないが、18世紀後半代になると、擂鉢の他、燈具、徳利、仏花瓶等、器種の増加が認められる。(注28)

擂鉢を除くこれらの器種の多くのものは、いずれも緻密な胎土を用いて充分焼き締められており、灰色で炻器質に近い焼き上がりとなっている。備前焼製品を連想させるものであり、文政四（1857）年

と少し新しい文献(注29)であるが、「備前酒徳利」「同断油皿類」等の名称が認められ、「錆○○」も多様されている。このように炻器質に焼き締った錆釉製品は、備前写しと考えて良いであろう。

中村遺跡からは、腰部が丸味を帯び比較的口径の大きい燈明皿、受皿（図・3－6）の他、小鉢、仏花瓶等が出土している。一方、鎌原遺跡からは、錆釉の燈明皿、受皿、油徳利等の出土が知られる。

(4) 緑釉

瀬戸地域において、ルス（呂宋）釉と呼ばれる緑釉がある。これは、従来の織部にみられる緑釉と異なり、明るい緑に発色しており、透明度が高く、器面に均一に施釉されている。

安永八（1779）年他の墨書銘の伴う手焙(注30)が知られているため、中村遺跡出土資料についても充分検討したが認められなかった。このように緑釉製品で18世紀に位置付けできる資料は少く(注31)、文献的にも調査不足の現状である。伝世資料としては、さらに下って文化十二（1815）年他墨書銘の、貼付朝顔文手焙(注32)が知られる。これは、緑釉製品を多く焼成している勇右衛門窯跡から出土する手焙に、酷似した文様を伴う資料である。

4. 器形的特徴

(1) 水鉢・半胴甕

灰を多く含んだ御深井釉を掛けた水鉢（甕）（図・3－4）が、中村遺跡から出土している。図示したように、口縁部を中心とした破片であり、高台等の様相は不明である。

水鉢は、従来19世紀に盛行する器種としてとらえられており、類似資料は、勇右衛門窯跡(注33)を始めとする、瀬戸美濃地方の諸窯から多数出土している。しかし、中村遺跡から出土したことにより、細かな注意がはらわれるようになり、特に口縁端部にその特徴が表われていることが認められるようになった。

図・3－5の双耳水鉢(注34)（甕）は、外器面に丸のみ状の工具を用いて、竹林と虎を二面に分けて彫り込んでいる。さらに外面には鉄釉を掛け一部に灰釉を流し掛け、内面に白濁気味の御深井釉を掛けている。又、底部外面には、「筑後守□代目加藤弥左衛門景光作　天下一　明和二酉（1765）年の刻銘がある。中村遺跡出土の水鉢から20年程溯るもので、趣を異にする点もあるが、ほぼ同一系譜に基づく器形と考えて良いであろう。

前述の2点は、いずれも口縁端部が幅広く面取りされているが、中央部が僅に窪む傾向があるものの、口縁内側の上端部が極端に下がることなく、外側上端部とほぼ水平を保っており、18世紀後半の特徴としてとらえることができる。しかし、全体には、半胴甕(注35)（赤津）に近い形状を示しており、胴部も、ほぼ直立している。中村遺跡から出土した半胴甕（図・3－3）も同時期と考えて良いであろう。

19世紀になると、口縁部は、さらに幅広く発達すると共に、口縁上部中央の窪みが顕著となり、口縁内側上端部へ弓なりに下がる傾向が目立つようになる。そして、胴部上半から口縁部にかけて、朝顔形に外反するようになる。さらに、器面の装飾は、荒い篦彫りで器面全体に施されるようになり、印花文等を伴う例もある。又、流し掛けされる釉薬も、鉄釉だけに留まらず、瑠璃釉、緑釉等が、同時に複数用いられるようになっている。

(2) 捏鉢・片口鉢

中村遺跡出土の灰釉捏鉢には、口縁端部を面取りし、外面へ「 状に突出する（図・1－1）ものがあり、鎌原遺跡においてもその出土が認められる。胎土は、灰白色で細かく堅く焼き締ってお

り、貫入の少い灰釉が薄く均一に掛けられている。

この口縁部の特徴は、この時期のものと考えられ、安政年間初期に廃絶した加賀藩江戸屋敷内、梅之御殿(注36)（東京都文京区本郷）においては、ほとんど認められず、すでに口縁端部を外側へ折り返し、幅広い帯状の口縁のめぐる形となっている。又、胎土も黄白色でザックリとした焼き上がりとなり、口縁部に緑釉を流し掛けたものも認められる。

さらに、松本城二の丸御殿跡（長野県松本市）においては、口縁端部を外側へ折り返した口縁部だけとなり、在地産捏鉢も同様の口縁部の特徴を示している。又、底部に「杢本セトヤ　喜右衛門行　品野　勝四郎　三(注37)　亥　八番」と墨書された灰釉の捏鉢（図・1－3）が出土している。これは、後の調査で、明治時代の前半代に品野地区において焼かれたことが判明しており(注38)、類似の口縁部の特徴を残しながら、引き続いて焼き継がれていたことがわかる。

一方片口鉢は、図・1－4が中村遺跡より出土している。口縁部上端が面取りされると共に僅に厚くなり、口縁外側下部に沈線がめぐっている。片口部先端は、鉢部口縁部より僅に高く、先端部は僅に肥厚し沈線を伴う。腰部は、篦削り成形痕が顕著に認められ、半球状に丸い。高台部、外面底部、腰部下半を除く全面に淡い褐色釉が掛けられている。中村遺跡からは、底部から口縁部へ直線的に開く鉢部をもつ片口鉢は出土していない。

(3)　擂鉢

口縁部外面に認められた、口縁端部からの折り返しによる成形痕は、中村遺跡出土資料（図・3－1・2）の中では、一部を除いて認められなくなり、僅に口縁下部に沈線状の窪みが認められるのみである。そしてこの窪みは、内面へ突出し、線状に盛り上がって口縁内面下部をめぐっている。この盛り上がりの直下付近より、おろし目となる櫛目が施されており、15本以上が一単位となり、見込み部にも施されている。又、外面は、口縁下部まで篦削りによる調整痕が認められる。全面に錆釉を掛けているが、重ね焼きの際、目土と接する外面腰部は、拭いとられている。又、口縁部には、片口様の注ぎ口は認められない。

(4)　燈具

中村遺跡出土の燈具は、燈明皿と受皿（台）を基本的組合せとしており、燈明皿には、錆釉と灰釉とがある。

受皿（台）には、皿に円形の桟を設けたもの（図・3－6）が最も多く、錆釉が掛けられている。この他、皿部の桟が円筒形に大形のもの、皿部に脚台を伴うもの（図・3－7、ただし上部欠損。）が認められるが、出土点数は少い。

錆釉を掛けた燈明皿及び受皿は、灰色の細かい胎土で、炻器質に焼き締っている。いずれも外面は、篦削り成形されており、腰部は丸味を帯びた成形となり高台は認められない。

ただし、俗に「たんころ」と呼ばれる秉燭類や、燭台は出土していない。

(5)　仏餉具

中村遺跡から、灰釉仏餉具が出土しているが、小片が多く計測が困難である。一方、鎌原遺跡からの出土例では、坏部口径 7.2 ㎝内外、全体高 5.6 ㎝内外を測るが、前代より坏部が浅く小口径となり、全体に小形化する傾向が認められる。

仏餉具は、最初に坏部を成形し、若干時間を経た後、逆転させて、付高台を付ける要領で、厚目の粘土の輪を接合させ挽き上げたもので、脚部はハの字形に広がっており、端部外面が盛り上

がり、断面は三角形を呈す。

(6) その他

その他の特徴的な器種として碗類、皿類、徳利類、香炉類、壷類を掲げることができる。

碗類は、施釉・施文技法の示す特徴の項で述べたように、陶胎上絵付碗、上下掛け分け碗、鎧手碗等が特徴的であるが、広東形の碗は、磁器、陶器共に出土していない。

皿類は、前述したようにその出土量が少く、18世紀後半代の資料の出土は認められない。さらに、馬の目皿、石皿の類の出土も認められない。

徳利類についても、出土例が少くこの時期の特徴をつかむには至っていないが、燗徳利類、蕎口を伴う薄手の徳利類の出土は認められない。

香炉は、口径10㎝内外のものが多くなり、器高も低くなる。粘土紐を尺取虫状に貼り付けた三脚を伴うが、小さく低いものとなる（図・3-9）。一部に丸のみによる半菊文も認められるが形骸化したものであり、淡い褐色を掛けたものが多い。

壷類は、鉄釉双耳壷（図・3・10）が出土しており、かみた窯跡出土資料（図・3-11）に類似資料がある。

おわりに

中村遺跡、鎌原遺跡等から出土する陶磁資料から、18世紀第Ⅳ四半期を中心とした18世紀後半代に、瀬戸美濃系諸窯において生産されたと考えられる資料を抽出すると共に、生産地側の所見、文献的側面、伝世資料、消費遺跡の出土状況等の観点をふまえて、その特徴について述べてきた。

資料的に不充分な点も認められるが、技術的な面からは、陶胎上絵付、掛け分け、鎧手、錆釉等、形態的には、水鉢（甕）・半胴甕、捏鉢、擂鉢、燈具等に、この時期の特徴を認めることができる。

なかでも、瀬戸地方における上絵付技術は、従来、加藤民吉が肥前の製磁技術を習得した際に、共に瀬戸へ伝えられたものと考えられてきた。しかし、中村遺跡出土資料と窯跡出土資料に加え、『張州雑志』の記述等からも、少くとも18世紀第Ⅳ四半期における、陶胎上絵付技術の存在は、確実なものとなった。

又、上下掛け分け碗を始めとする掛け分け製品は、関東地方を中心とする多くの遺跡からの出土が知られていた。(注39) 今回の中村遺跡出土資料と、市左衛門窯跡を始めとする瀬戸美濃地方の諸窯跡出土資料の検討により、18世紀第Ⅳ四半期に位置付けしうる資料を抽出することができた。さらに、この掛け分け碗の系譜はⅣ形態以上溯ることができることなどから、同第Ⅱ四半期あるいはこれより古い可能性も考慮する必要性が生じている。一方、小形化すると共に、数形態下る器形も認められ、これらを含めると100年前後に及ぶ長期間にわたって焼き継がれた碗であることが判明した。

しかし、この時期の幾つかの特徴を認識したとは言え、近世瀬戸美濃の窯業史を解き明かすには、ほど遠く長い道程である。なかでも、18世紀は、肥前磁器の侵透に押され、各消費地において主客の逆転を余儀無くされていた時期であり、その苦境の中における、陶胎上絵付、各種掛け分け、鎧手、錆釉等の数々の試みは、永い伝統を培った窯業地として、次代（染付磁器焼成等）を切り開くエネルギーの蓄積を垣間見る思いである。

中村遺跡は、生活址に直結しない点、鎌原遺跡は、調査継続中のため出土資料について詳細に

わたる検討ができなかった点、あるいは、農村部であるための出土資料の片寄りの有無等、さらに考慮すべき不充分な点が多く認められる。このため、これらの点については、近年発掘調査された、麻布台1丁目遺跡（東京都港区）、芝公園1丁目遺跡（同）、真砂遺跡（東京都文京区）、梅之御殿跡（同）[注40]、桜町遺跡（富山県小矢部市）[注41]、戸切地陣屋（北海道上磯郡上磯町）[注42]、開陽丸海底遺跡（北海道桧山郡江差町）[注43]等に参考とすべき点が多い。特に、麻布台1丁目遺跡からは武家屋敷跡[注44]、芝公園1丁目遺跡からは近世墓址群[注45]が検出されているが、いずれも富士山が宝永四（1707）年に大噴火した際の火山灰等の堆積面が確認されており、遺構、出土遺物の状況にも変化が認められるようで興味深い点が多くある。報告書等、資料の公開を待ちたい。[注46]

このように、近世に関する発掘調査例は増加しており、一つ一つ新らたな事実がもたらされている。このため本稿において不充分な点は、先学諸氏の御叱正をいただくと共に、さらに資料の集積を得て堅固な時代観を築く基礎としたい。

小稿をまとめるにあたり、横沢克明氏、藤沢良祐氏を始めとする多くの方々と機関より貴重な資料の提供と御教示をいただいたので、記して御礼申し上げるものである。

伊藤嘉章、今井静夫、大江正行、川上正志、鈴田由紀夫、田口昭二、寺島孝一、西田泰民、森本伊知郎、山口剛志。

学習院大学、財団法人岐阜県陶磁器陳列館、渋川市教育委員会、瀬戸市歴史民俗資料館、嬬恋村歴史民俗資料館、土岐市陶磁歴史館。

注1. 新井房夫「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『特集　火山堆積物と遺跡Ⅰ　考古学ジャーナル』　ニューサイエンス社　1979。

注2. 鎌原遺跡一次調査分について、群馬県吾妻郡嬬恋村教育委員会より『鎌原遺跡発掘調査概報』　1981、学習院大学より『天明3年（1783）浅間山大噴火による埋没村落（鎌原村）の発掘調査』　1982、がそれぞれ刊行されているが、出土遺物についての記述は少い。

注3. 『中村遺跡　関越自動車道（新潟線）渋川インター地域埋蔵文化財発掘調査報告書（KC－Ⅲ）』　渋川市教育委員会　1986。

注4. 拙著「中村遺跡出土の近世陶磁」前掲書所収。

注5. 『国内出土の肥前陶磁』　佐賀県立九州陶磁文化館　1984　所収編年図、他。

注6. 1984年6月、五島美術館において開催された『江戸のやきもの』シンポジウムの際、発表用資料として、楠崎彰一、宮石宗弘両氏を代表とする近世陶磁研究グループが作成配布した『瀬戸・美濃近世編年表』、他。

注7. 陶胎上絵付丸碗が採集されている。瀬戸市歴史民俗資料館保管。

注8. 陶胎上絵付碗、皿が採集されている。土岐市陶磁歴史館保管。

注9. 内藤東甫『張州雑志』　寛政元辛酉（1789）年。東甫の死後赤林信定が藩主に献上。原本は、名古屋市蓬左文庫蔵。愛知県郷土資料刊行会が復刻、1975。序には寛政元年辛酉年とあるが、寛政元年は、己酉であり、辛酉は寛保元年にあたる。

注10. 注5.所収。前山博「近世　伊万里焼の流通」の引用文献の内『前川家資料』「明和九壬辰（1772）年誂物之雛形」

注11. 財団法人岐阜県陶磁器陳列館保管。

注12. 『かみた第1・2号古窯』愛知県教育委員会　1974。出土資料は、瀬戸市歴史民俗資料館保管。

注13. 『赤津長根第1・2号窯発掘調査概要』　瀬戸市教育委員会　1981。　出土資料は、瀬戸市歴史民俗

資料館保管。

注14. 『大川東窯』　瑞浪市教育委員会　1974。出土資料は、瑞浪陶磁資料館保管。

注15. 『田ノ尻窯』　瑞浪市教育委員会　1981。出土資料は、瑞浪陶磁資料館保管。

注16. 故古川庄作氏の採集資料であり、後に発掘調査された「かみた窯跡」ではないかと考えられている。採集資料は、財団法人岐阜県陶磁器陳列館保管。

注17. 『不動山窯跡』　嬉野町教育委員会　1979。

注18. 『波佐見古陶磁文様集』　長崎県窯業試験場　1982。　一部実見。

注19. 田口昭二「Ⅶ連房式登り窯と施釉陶器」『美濃焼』　ニューサイエンス社　1983。

注20. 火入、小壷等は内面無釉。

注21. この他「天保十二(1841)年辛丑正月改尾張物直上帳」に「腰錆大花」「腰サビ小服」等の記述がある。『多治見市史　窯業史料編』　多治見市　1976。
『瀬戸資料全』原本は、名古屋市鶴舞中央図書館蔵。

注22. 個人蔵。

注23. 判読困難な資料が多いが、長方形の印面に、陽刻文字で「出来山」「新山」等がある。

注24. 井之口窯跡採集資料は個人蔵。資料中に「新山」印のあることを今井静夫氏より御教示いただいた。楢崎彰一・他『美濃の古陶』　光琳社出版　1971。に一部資料が紹介されている。

注25. 加藤孝氏等が採集されたもので、瀬戸市歴史民俗資料館と、愛知県陶磁資料館に寄贈されている。

注26. 半田川窯跡出土資料は伊藤嘉章氏より、市左衛門窯跡出土資料の内、瀬戸市歴史民俗資料館所蔵資料については同館より、それぞれ実測図を拝借した。尾呂窯跡、かみた窯跡、勇右衛門窯跡出土資料については、『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅳ』　愛知県教育委員会　1985　より転載した。

注27. 『尾張徳川家旧藩古帳』享保六(1721)年の項に「御室焼」の記述がある。大河内定夫　「旧藩古帳にみられる瀬戸焼の記録」『金鯱叢書』第二輯　徳川黎明会　1975。

注28. 大窯期にも一部器種の増加が認められる。

注29. 「五ケ村陶器荷数等申上書」『多治見市史』窯業史料編　多治見市　1976。「錆徳利」は、寛政十二年まで遡ることができる。

注30. 個人蔵。

注31. 同志社大学構内遺跡において、18世紀後半と考えられる層位より出土したといわれる。藤沢良祐氏御教示。

注32. 個人蔵。

注33. 瀬戸地域では、北新谷地区の窯からの出土が多い。

注34. 個人蔵。

注35. 『瀬戸資料全』によると、胴部の直立する「赤津半胴」と、胴部に丸味を帯び壷状の形状を示す「半胴」とに分けられており、他の文献には「赤津半銅」「瀬戸半銅」の名称がみえる。

注36. 寺島孝一氏の御好意により、一部資料を拝見させていただいた。

注37. 拙著「長野県出土の近世陶磁」『研究紀要』　4　愛知県陶磁資料館　1980。

注38. 注36. に同じ。

注39. 動坂遺跡（東京都文京区）、白山四丁目遺跡（同文京区）、大胡バイパス遺跡（群馬県勢多郡大胡町）、小鳥町遺跡（愛知県名古屋市）、　他。

注40. 鈴木公雄・他「東京都港区内の江戸時代遺跡」『特集・江戸時代を掘る　季刊考古学』13号　雄山閣出版　1985。　他。

注41. 注40. に同じ。

注42. 小林　克「江戸の街を掘る　大名屋敷（真砂遺跡）」『特集・江戸時代を掘る　季刊考古学』13号　雄山閣出版　1985。

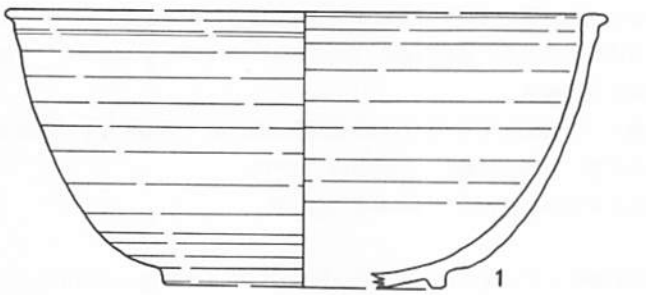
注43. 寺島孝一「東京大学本郷構内の遺跡の調査」『東京都遺跡調査・研究発表会Ⅺ　発表要旨』　武蔵野

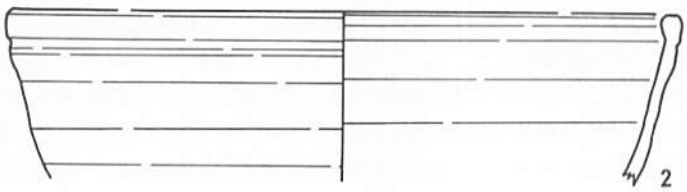
文化協会考古部会他　1986。　他。

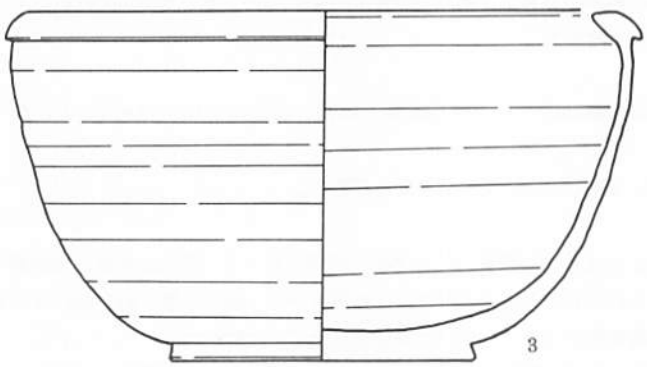
注44.『富山県小矢部市桜町遺跡（古苗代・鷲場地区）』　小矢部市教育委員会　1981。

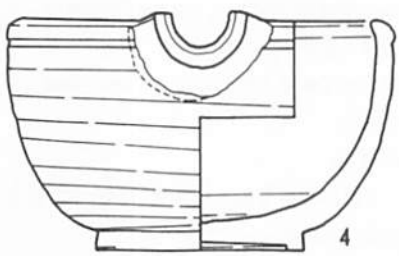
注45.『史跡松前藩戸切地陣屋跡　発掘調査概報』　上磯町教育委員会　1981～86。

注46.『開陽丸海底遺跡の発掘調査報告Ⅰ』　江差町教育委員会、他　1982。　他。

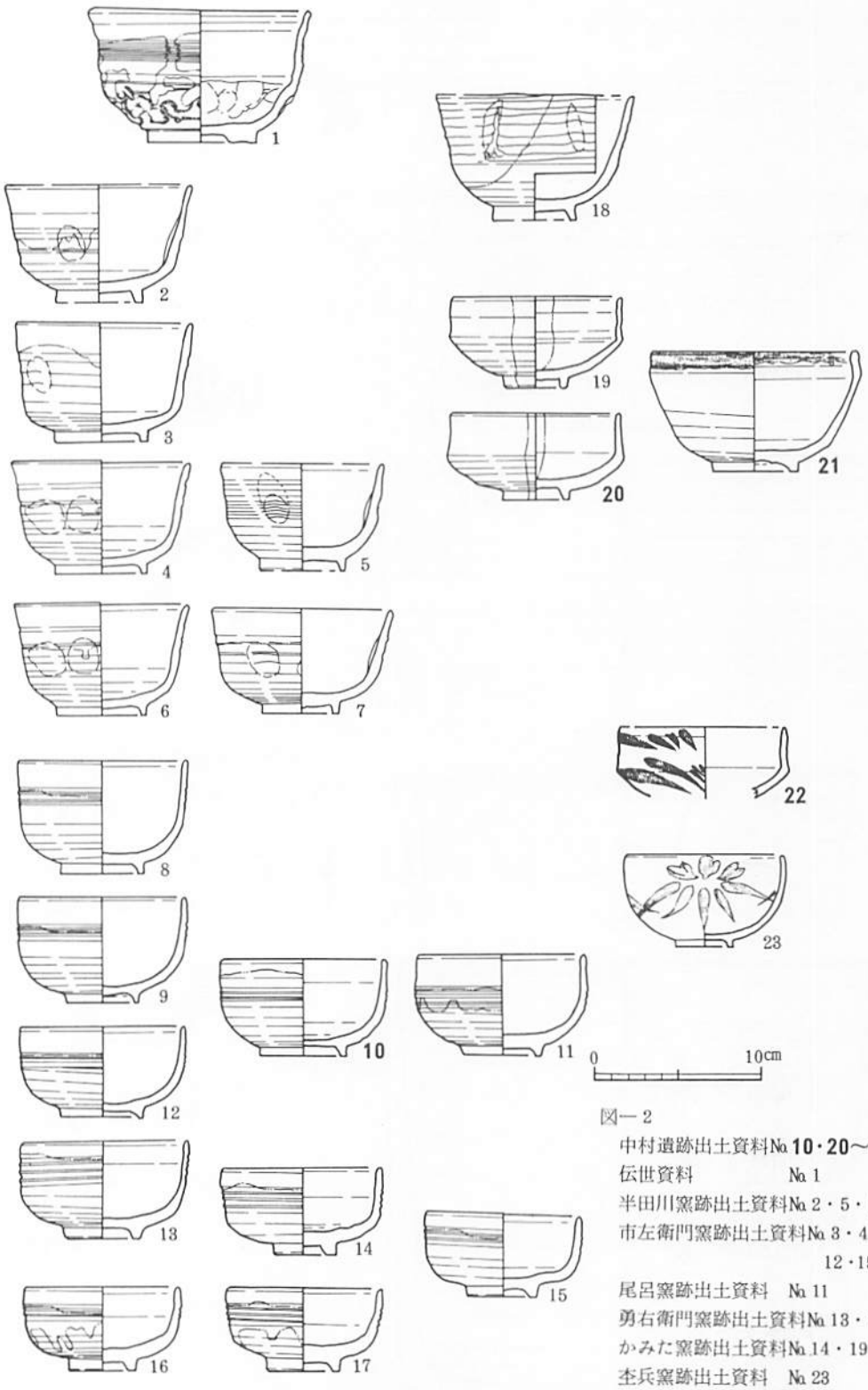






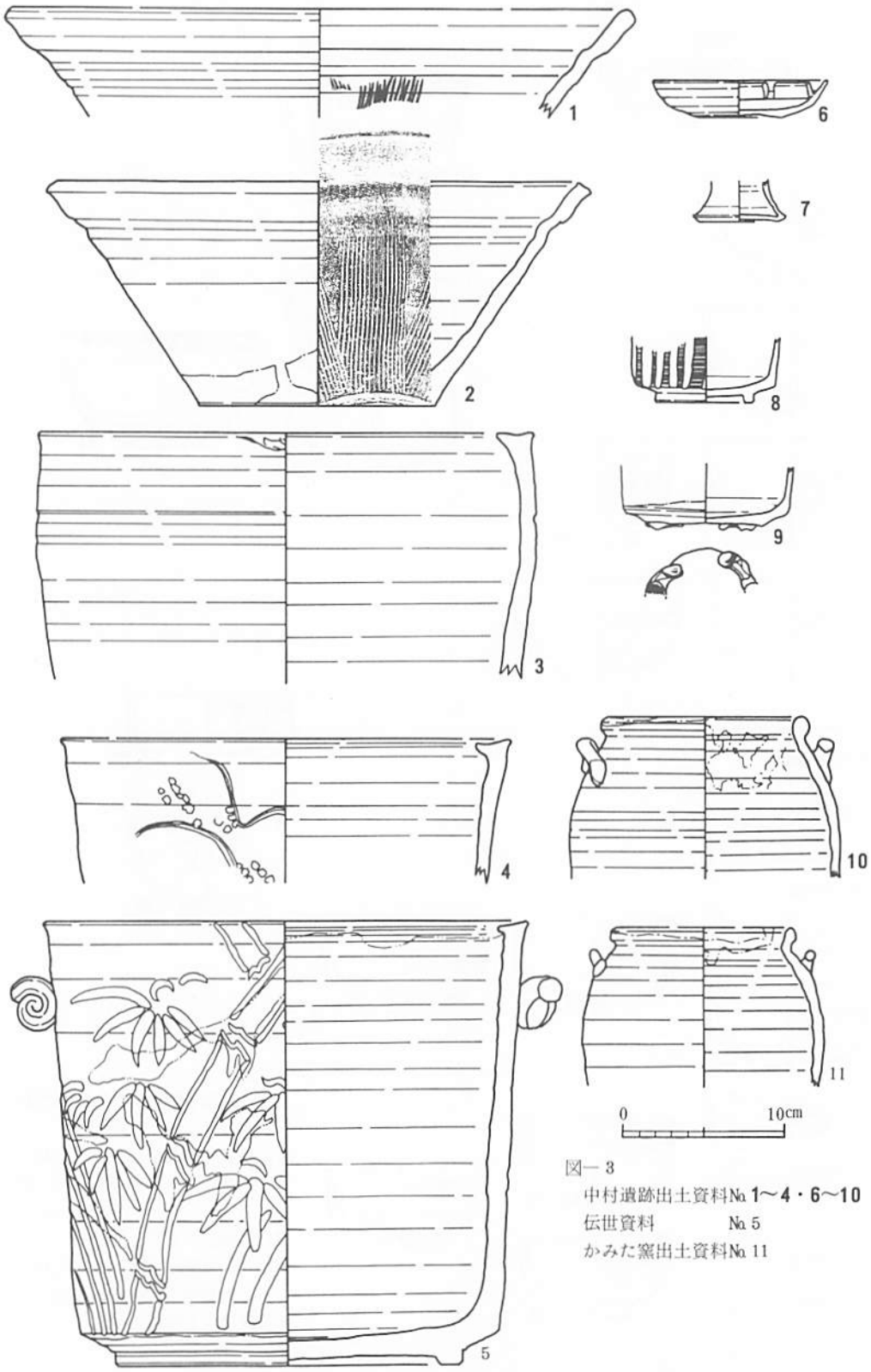


図－1
中村遺跡出土資料№1・2・4
松本城二之丸御殿跡出土資料
№3



図－2

中村遺跡出土資料No.**10・20～22**
伝世資料　No.1
半田川窯跡出土資料No.2・5・18
市左衛門窯跡出土資料No.3・4・6～9
12・15
尾呂窯跡出土資料　No.11
勇右衛門窯跡出土資料No.13・16・17
かみた窯跡出土資料No.14・19
杢兵窯跡出土資料　No.23



図－3
中村遺跡出土資料No. 1～4・6～10
伝世資料　　No. 5
かみた窯出土資料No. 11